

功利主義の道德

二 宮 源 兵

序

私は、さきにカントの形而上学的倫理学について述べ、人間の倫理的行為は、断言的命法、即ち人の行為の格率（一行為を行うと云う心の決定）が、普遍的法則（万人に妥当すべき法則）であると云う自覚的反省に基いていなければならないことを強調した。カントのこの断言的命法の主張は、主我的な、相対的な、無規律な今日の社会に於ては、一つの警世の言葉として、預言として吾々に迫り来るところのものである。

私は、ここに他の一つの警世の教ともなるべき功利主義の道德を採り上げて論じ度いと思う。ベンサムとミルとに依つて唱導された功利主義は、十八世紀の中葉から末葉にかけて英国に発生した産業革命に伴うて起つた批判的、機械的、科学的社会に呼びかけた学説であつて、私はこの功利主義の中に、普遍的な且つ不変的な警世の教を読み出すのである。

ここに述べる功利主義の道德は、ミルが一八六三年に出版した「功利主義」(Utilitarianism)に拠るものであるから、本論に入るまえに、ミルの生涯の梗概と功利主義の由来について述べ度いと思う。

一、ミルの生涯と功利主義の由来

ミル (John Stuart Mill, 1806—73) は、ジェームス・ミル (James Mill, 1773—1836) の子として、ロンドンに生れた。彼の教育は、当時の英国の上流家庭の子弟が、家庭に於て家庭教師によつて教育されたように、彼も亦家庭に於て父ジェームスによつて教育されたため、学校教育を受ける機会がなかつた。しかも尚よく彼が当代随一の学者として盛名を馳せるようになった所以のものは、父ジェームスの聡明さと異常な努力に拠るものもさることながら、ミル自身の特異な天才的才能に拠るものであることは疑いない。彼は、三才の時ギリシヤ語のアルファベットを教えはじめられ、八才の時には平易なギリシヤ語の原本を読むことが出来た。彼の「自叙伝」^(註一)によると、ギリシヤ語で読んだ最初の書は「イソップ物語」であつた。これに続いて、ヘロドトス (Herodotos) の著書「クセノフォン (Xenophon) の「クロ・ペディア」(Krou Pedia) や「ソクラテス回想録」(Memorabilia of Socrates)、ディオゲネス・レールティウス (Diogenes Laertius) の哲学者伝、ルーカン (Lucan) やイソクラテス (Isocrates) の著書を読んだ。更に彼は、プラトン (Platon) の対話篇の中の「ユーシフロン」(Euthyphron) や「テアテトス」(Theaetetus) を含む最初の六篇を読むことが出来た。これらの古典書以外に、多くの英書を通読して、既にこの年令に於て、中等学校程度の語学の知識を修得していた。ギリシヤ語を学ぶかたわら、八才の頃からラテン語をも学び、同時にユークリッドの幾何学をも研究し始めた。かようにして、彼は、十才の頃には、当時諸大学で読まれていた英語、ギリシヤ語、ラテン語等の諸書を読み、特にプラトンやデモステネス (Demostenes) 等の著書を愛読した。

十二才の時(一八一八年)、父ジェームス・ミルの「インド史」(History of India)^(註二)が出版されたのであるが、この頃から、父の指導の下に、スコラ哲学に関する諸書を読み、同時にアリストテレスの論理学を原書で読破した。後年彼が論理学に関する大著^(註三)をなすに到つたのは、この努力が実を結んだのである。

十三才の時、方向を転じて政治学と経済学との研究を始め、はじめてベンサム(註四)の道徳論や法律論に接したのである。彼の功利主義の理念は、既にこの時に胚胎していたのである。

実に彼は、十四才の頃には、当時大学に於て課せられていた程度の学科を修得していたのであつた。彼の少年時代は、一切のレクリエーションと絶縁して、ひたすら一途な勉学に費やされたのであつた。彼は、その自叙伝に於て、味気ない少年時代の生活を苦言をもつて回想しているが、彼の学問修得の業こそ、人間の知能活動の驚畏と云わなければならない。

十五才の時一ケ年間は、パリ大学に遊学して一層識見を博めた。十七才の時(一八二三年)法曹界に入る年来の希望をすて、父の就職している東印度会社の社員となつた。爾来二十三年間、同会社に勤続して高い地位を得、一八五六年その職を辞した。その後、一八六六年から二年間、国会議員として政治的生活をした以外は、死に到る迄主にあヴィグノン(註五)に居住して著作に専念した。

ミルは、その父ジェーム・ミル(註六)や先輩ベンサムの説く功利主義学派の雰囲気の中に育ち、経済学、論理学、倫理学等の諸学に精通したのであつた。彼の主な興味は、経済学(Economics)にあつたのであるが、彼はかたわら倫理学(Ethics)の諸問題をも研究したのであつた。論理学(Logic)に対する興味は、青年時代からのものであつて、彼の大著(論理学大系)(System of Logic)は、一八四三年、彼が三十七才の時の出版になつてはいるが、事實は既に三十才に満たない中に完成していたものようである。壮年時代以後に於ける彼の全努力は、全く経済学と倫理学との研究に払われたのであつた。彼の主著「功利主義」(Utilitarianism)は、一世を風靡した名著であるのみならず、実に不朽の古典とも云うべきところのものである。

「功利主義」に於ては、第一章に「序論」を述べ、第二章に於て「功利主義とは何か」の主題の下に功利主義の定義をなし、第三章に於て「功利主義の究極的制裁」の問題を論じ、第四章に於て「功利主義は如何なる証明を許すか」の

問題を吟味し、第五章に於て「正義と功利との関係」を論じている。

元来、ミルの学問研究に於ては、經驗的認識を基礎としたのであつた。即ち、彼の学問研究の方法は、凡そ四つの仮説に基いている。

第一、自然齊一の原理や因果律の如き自然法と称すべきものは、先驗的原理ではなく、經驗的原理である。

第二、帰納法は、推理の一方方法ではあるが、この方法は、現象の原因を明らかにすることによつて、その現象を説明することである。即ち、帰納法は、或る現象によつて、これらと関係のある他の現象を説明することに外ならない。

第三、吾々の認識の限界は、現象の世界にのみ限られている。即ち、認識は、ものの本質の世界には到達し得ない。

第四、客觀的存在と主觀的意識とは、嚴格に区別さるべきである。客觀的存在は、恒常的に知覚される可能性を有するものであり、主觀的意識は、恒常的に知覚する能力である。そして、主觀的意識は、自我を意味し、自らを意識しつつある現実的な意識状態の系列である。

經驗的認識を基礎とする学問研究の方法が、ミルの経済学や倫理学にも適用されたのであつて、この傾向から、現実的功利若くは幸福を原理とする功利主義の学説が生れたのである。

ミルの功利主義は、その先輩であり友人であるベンサム^(註七)の学説に直接改変を加えたものであつて、両者の間には、伝統的な関係が存している。この関係を明らかにするために、ベンサムの功利主義に含まれている二原理を述べる必要がある。ベンサムの功利主義の二原理とは、第一、自己の幸福の増進（自愛の原理）、第二、社会一般の幸福の増進（他愛の原理）である。ベンサムは、これら二つの原理を調和しようとして、自己の幸福の総和が社会一般の幸福になると云う所謂量的計算主義を主張したのであつた。

ミルは、ベンサムの自愛の原理即ち道德の目的は、自己の幸福を増進することにあると云う説を採らないで、他愛の原理即ち社会一般の幸福を増進することを究極目的のすると云う純粹の功利主義を主張した。ミルが、かような功利主

義を主張するようになったことには、二つの理由があつた。第一、このことはミル自身の内的経験に基き、第二、時代思想の影響を受けたと云うことである。

先ず第一、彼の自叙伝によると、彼は青年時代、思想的に精神的に苦悶した或る時期があつた。この思想的悩みと云うのは、自己の幸福と社会の幸福とは、果して何れを先にし、何れを後にすべきかと云う問題であつた。人間存在、人間生活の最も切実な問題として、自己の幸福を追求すると云う自然的生得的な衝動を誰でも否定する事は出来ない。むしろ、自己の幸福を追求すると云う自然的生得的衝動が、人間の根源的な本来の慾求であるのではないだろうか。然し反面、人は自己の慾求するものを全部得ることが出来たとしても、人は果して真に幸福であるであらうか。これらの問題は、相当の期間ミルの心に往来した重大な困難な問題であつた。ミルはついに、この問題に対して、人の真の目的、究極の目的は、自己の幸福を追求することではなく、他人の幸福、社会の幸福を実現することであることを決論したのである。実に、社会一般の幸福を追い求め乍ら、与えられた職業や芸術に対して、自己を捧げて生活することが人の義務である。ミルの信念は、ここに達したのである。ミルが、往々にして人道主義者であると評せられるのは、実にここに理由があるのである。

第二、ミルが自己の幸福の原理をすてて、他愛の原理乃至人道主義的思想を主張したのは、時代思想の影響に拠つたものである。ミルに影響を与えた時代思想と云うのは、一面に於ては、英国人が宿命的に持つてゐる経験論(Empiricism)であつた。英国の経験論の先駆者には、ロックやヒュームがいる。ロック(John Locke, 1632—1704)は、^(註)一切の觀念は経験的所与であること、一切の知識は、白紙に文字を書きつけるように、心に意識づけられるところのものであると主張する。ヒューム(David Hume 1711—176)は、一切の存在は、印象として知覚に与えられているもの自体を意味することを主張する。これらの心理学的に基礎づけられた経験論は、伝統的に英国人を支配している思想である。

ミルに影響を与えた時代思想の他の一つは、十九世紀後半以来、歐洲大陸に發達した自由主義乃至自然主義に対する

懷疑思想、實踐主義、及び自然科学の發達であつた。即ち、フランスに於ては、コンテ^(註九) (Auguste Comte, 1798—1857) の實証哲學に基く他愛主義が唱導され、ドイツに於ては、マルクス^(註一〇) (Karl Heinrich Marx, 1818—83) の唯物論に基礎を置く社會主義、ラース、マツハ、アヴェナリウス等の實証論が流行した。ラース^(註一一) (Ernst Laas, 1837—85) は、實証論者として、吾々の認識は、現実的、感覺的、積極的な対象と、これに関する論理的法則とを基礎として成立することを主張した。マツハ^(註一二) (Ernst Mach, 1838—1916) は、實証論的記述學派に屬し、學は現象を記述することを本旨とするところのものであつて、従つて、學は實用若くは現実と離れるものでないことを主張した。アヴェナリウス^(註一三) (Richard Avenarius, 1843—96) は、經驗批判論者として、學の方法は、主観的附加物を除き、純粹経験を捕捉することにあるとした。更にドイツに於ては、英國學派と軌を一にする倫理學、即ち、善と幸福との一致を説くロッツエ (Hermann Lotze, 1817—81) の思想が流行した。

かような學的傾向と共に、歐洲では著しく自然科学の研究が發達し、十九世紀当初のフルトン (Robert Fulton, 1765—1815) の蒸氣機関の發明を始め、多くの發明發見が相次いで行われた。特に、ダーウィン (Charles Robert Darwin, 1809—82) が “On the Origin of Species by Means of Natural Selection” (「自然淘汰による種の起原」) を、一八五九年出版して、進化論を唱導した事は、學の研究に於て觀察、分析、實驗、綜合等の經驗的實際的方法が如何に重要であるかを實証したところのものである。この事は、ベーコン (Francis Bacon, 1561—1626) が、既に一六二〇年、 “Novum Organum Scientiarum” (「學の新機關」—學研究の新方法) を出版して提唱した歸納法の學研究法が実を結んだことを示すところのものである。

ミルが、利己主義に根ざす博愛主義から出發して、純粹の博愛主義即ち社會一般の幸福を目的とする功利主義を提唱したのは、右に述べたような、實証的、經驗的、社會的時代思想の倫理的表現と見ることが出来る。

二、功利主義の道德

一、功利主義 (Utilitarianism) (註一四)

「功利主義」の語義は、ミルの名著、「Utilitarianism」の第二章に、次の如く定義せられている。

「一行為は、それが幸福を増進する限りに於て善であり、幸福の反対を生ずる限りに於て惡である」(註一五)更に、

「功利主義の道德は、人は他人の利益のために自己の最大の利益を犠牲に為し得る力を有することを認める。然し、功利主義の道德は、犠牲そのものが善であると云うことを認めない。幸福の総量を増加せず、或は増加する傾向を有しない犠牲は、浪費と考えるべきものである。賞讃に値する（訳者註、善い効果即ち他人に快樂を与えるような）自己否定のみ、他人即ち集合的に人類、或は人類の集合的關心を持つ個人の幸福若くは幸福の或る手段として役立つところのものである」(註一六)更に又、

「繰り返えて云わねばならないことは、功利主義の攻撃者があまり承認しない事ではあるが、或る行為を正であるとするための功利主義の標準となる幸福なるものは、行為者自身の幸福ではなくして、これに關係ある凡ての人々の幸福であると云うことである。行為者自身の幸福と他人の幸福との關係に就ては、功利主義は私心のない博愛な傍觀者と同じく、嚴格に公平でなければならぬ事を自らに要求する。吾々は、ナザレのイエスの金言中に、功利の倫理學の完全な精神を読む。他人より為され度いように他人にも為し、又己れと同様にその隣人を愛する事は、功利主義の道德の理想的完成である」(註一七)

これらの功利主義に關するミルの定義を通觀すると、凡そ三つの問題が注目される。

第一、一般的善論の立場から見ると、幸福と善とが一致すること。この説は、明らかに淵源を遠くギリシヤ哲學に發

するキレネ説(註一八) (Cynatics) やエビク로스説(註一九) (Epicureanism) の幸福説 (Eudæmonism) 若くは快樂説 (Hedonism)

に一致し、近くは、英国のホッブス^(註二〇) (Thomas Hobbes, 1588—1679)・エルヴェシウス^(註二一) (Claude Adrien Helvétius, 1715—1771)等の倫理学説と一致する。これらの学者は、何れも、ミルが主張するように、人(自己若くは他人)に快樂若くは幸福を与える行為、或は人の意慾を満す行為が善であり、然らざるものが悪であることを主張する。

第二、道徳的判断の結果論。即ち、ミルの倫理学説は、道徳的善惡の判断は、行為者の主觀的動機や、行為者の行為に対する方法や手段を対象とするものではなく、それは、行為者の行為の結果、即ちその行為が他人に幸福を与えるか不幸を与えるかと云うその行為の結果を対象とすべきであると云う結果論である。この点に於て、ミルの功利主義は、道徳的判断の問題に於て、カントの説く動機論に對して、明らかに結果論の主張である。このことは、「論集」第二卷一、二合併号^(註二二)に於て述べたように、道徳若くは善は、「あなたが一つの普遍的法則となることを、直接に意慾し得るような格率に従つてのみ行為せよ」と云う内的な自覺的反省若くは命法の自覺に成立すると云うカントの思想を思い浮べる時、明らかになるのである。

第三、他愛主義。ミルの功利主義は、幸福が善ではあるが、真に善である行為は、自己の幸福ではなくして、他人(社会一般)の幸福であると云う他愛説の好例である。ここに、ミルの人道主義的立場が明白に表われているのであつて、単に幸福が善であると云う一般的善論の立場に於ては、キレネ学派やホッブス等の自愛論者とも一致するけれども、人間行為の究極目的は、自己の幸福(自愛)ではなくして、他人の幸福(他愛)でなければならぬ事を強調するのである。

二、幸福

(註三三)
論

一、個人の幸福と社会の幸福

上述の如く、ミルは、社会一般の幸福を以つて究極の道德的善であるとした。この説の根底には、ベンサム思想即ち各個人の幸福は、各個人に対して善であるから、各個人の集合体である社会の幸福も亦全体として善であると言う思想が存在している。ここに、はしなくも、個人の幸福と社会の幸福との関係は、どのように理解すべきであるかと云う問題が生ずるのであつて、この問題は、ベンサムの倫理学に於ける問題であると同時に、ミルの倫理学に於ける問題でもあつた。

この問題に関するベンサムの解決は、個人の幸福の総和が、社会の「最大多数の最大幸福」(“The greatest happiness of the greatest number”)即ち最高善であると主張する点にある。ミルに依れば、個人の幸福と社会の幸福とは、一致する事が多いけれども、必ずしも一致しないこともある。両者は、却つて衝突することさえもある。かように、両者が衝突するような場合には、人は自己の幸福を社会の幸福の為に犠牲にしなければならない。凡て社会の幸福を生ずる行為が善であり、そして、その社会の幸福が最大限度に増大し、而もその最大限度の社会の幸福が、社会の最大限度の人々によつて享樂される場合、即ち社会の「最大多数の最大幸福」が最高善である。同時に、かような社会全般の幸福を目的とする行為が、真に自己の幸福を得る道でもある。古来、聖者や勇者達が、身を犠牲にして国家社会の為に尽したような行為は、却つて自己の価値を高めると同時に社会の幸福を招来する道であつたのである。(註三四)

かように、ミルは、自己の幸福を社会の幸福の為に犠牲にしなければならないと云う犠牲的精神を強調するけれども、彼の言わんとする要点は、真に価値があり善である行為は、犠牲そのものではなくて、他人に幸福を与えるような犠牲的行為の結果であると云うことである。ミルのこの博愛主義は、アウギュスト・コントの人道教 (Religion de

[humanité) 即ち過去、現在、未來に亘る全人類を崇拜の対象にすると云う倫理的宗教觀の影響と云われているが、ミルの立場は、コントの人道教をキリスト教的人道主義に展開したものと見る事が出来る。前に述べたミルの功利主義の定義に用いた言葉を繰り返して述べると、この事は明らかである。

「或る行為を正であるとするための功利主義の標準になる幸福なるものは、行為者自身の幸福ではなくして、これに関係ある凡ての人々の幸福であると云うことである。……吾々は、ナザレのイエスの全言中に、功利の倫理學の完全な精神を読む。他人より為され度いように他人にも為し、又それと同様にその隣人を愛する事は、功利主義の道德の理想的完成である」
(註二五)

社会の幸福に対して自己の幸福を犠牲にしなければならないと云うミルの主張は、禁慾主義を現わしていると云うことも出来る。ミルの倫理學説は、本来の性質から云えば、社会の幸福を究極目的とする云う快樂説であつて、禁慾主義ではない。然し、社会の幸福を招来するための一つの手段として取られる禁慾主義即ち自己を他人の爲めに捧げると云う禁慾主義は、大いに価値あるところの賞讃すべき行為である。然し、ミルの功利主義に於ては、その禁慾的生活そのものが、究極的目的ではなく、これに依つて生ずる社会一般の福利が目的であることを繰り返して認識しなければならぬ。

さて、ベンサムの學説に於ては、個人の幸福に重点を置き、ミルの學説に於ては、社会一般の幸福に重点を置くことは、右に述べた通りであるが、ベンサムの學説とミルの學説との更に一つの相違点は、ベンサムが快樂(幸福)の計算主義即ち個人の幸福の和が社会の幸福になることを主張するのに反して、ミルは幸福に性質上の差別を認める点にある。ミルに従えば、功利主義は快樂(幸福若くは功利)を目的とするのであるが、かような快樂は、往々功利主義の攻撃者が云うように、決して低級なもののみとは限らない。快樂には、理性的快樂、感情的快樂、及び意志的快樂等がある。是等の快樂は、肉慾的快樂に比べると遙かに高尚な快樂である。その理由を、ミルは次のように述べている。

「二つの快樂の中、是等兩者を経験する凡ての人若くは殆ど凡ての人が、それを選択するのに何等道德的義務の感情に關係なく、決定的選択をなす方が、より以上望ましい快樂である」(註二六)

この言葉によると、ミルは、快樂の性質上の優劣を輿論に帰している。即ち、二つの快樂の中、より多くの人が選択をなす方の快樂が、より善い快樂であると云うのである。「吾々は満足した豚よりも寧ろ不満を感じている人間である事を希い、満足している愚者よりも寧ろ不満を感じているソクラテスである事を慾する」と云う言葉は、(註二七)おそらく凡ての人或は殆ど凡ての人が是認するだろうと云う意味に於て、ミルの功利主義に於ける快樂の質的規準となるものである。

ミルの功利主義の學說に於ける幸福論について、注意すべき更に一つの点は、功利主義の目的とする幸福に關して批難論があることである。(註二八)これらの批難論者は、次のように云う。幸福は、人間生活の合理的目的であり得ない。何故ならば、幸福は到底到達し得ないものであるのみならず、人間は幸福を得なくても生活し得るからである、と。ミルは、この批難論に對して、次のように答えている。

第一、幸福は、達し得ないものであるから、人間生活の合理的目的でないと斷ずることは出来ない。若し、幸福が、言語で表現し得ないような歡喜興奮の繼續を意味するとするならば、疑もなく幸福は、達し得ない或るものであるであろう。然し、幸福は、かような字頂天の生活ではなくして、少量であつて一時的な快樂と、多量であつて雑多な快樂とが相雜り、かようにして積極的快樂が消極的快樂に勝つていような心的状態であつて、吾々は日常まさしくこれを経験し得るところのものである。

第二、人間は、幸福がなくても生活することが出来るから、幸福は人間生活の合理的目的ではないと斷ずる事は出来ない。勿論、吾々は、幸福以外の徳をも慾求するものであり、而も、徳はそれ自体に於て善なるものである。然し、最も素朴的形式に於ては、徳はまさしく快樂を得、不快を避ける方便であつた。人間の道德的判斷が進むにつれて、

聯合作用によつて、ついに快樂を離れて單に徳それ自体が目的であると判断するようになった。然し、人間慾求の根本に於ては、他の徳の慾求よりも、快樂を求むることが先行している。従つて、人間が徳を積むと云うことは、結局徳を得る事が快樂（幸福）を生じ、不徳を致すことが不快（不幸）を生ずると云う確信を強めて行く事に外ならない。

二、道德的行為の動機 （註二九）

究極の善が社会一般の幸福であるにしても、自己の幸福を希わないものはない。自己の幸福を追い求める慾求は、疑いもなく生得的本能である。そうであるとすれば、生得的に自己の幸福を追求する個々人が、社会全般の幸福を究極の目的とすることの爲めには、何等かの充足理由がある筈である。これらの充足理由を、ミルは「制裁」（Sanctions）と名づけ、この「制裁」に二つある事を指適している。

（一）外的制裁 （External Sanctions） （註三〇）

外的制裁とは、行為の動機となるところの客觀的に与えられる強制力を云う。一般的に云えば、外的制裁には、自然に生起する生理的快苦のような自然的制裁、罪惡に対して課せられる法律的制裁、社会の毀譽褒貶のような社会的若くは輿論的制裁、宇宙の支配者である神から与えられる賞罰のような宗教的制裁の四類がある。人は、意識的に或は無意識的に、このような制裁に基いて、他人の幸福を図る行為を實踐するのである。ペーリー （註三一）（William Paley, 1743—1805）の如きは、特に人間行為の動機として、右の中、宗教的制裁を強調して、その学説を「神学的功利主義」（Theological Utilitarianism）と呼ばれた程である。ベンサムは、これらの外的制裁を特に強調して、ミルの道德的制裁論に、強力な資料を供給したのである。

（二）内的制裁 （Internal Sanctions） （註三二）

人間の道徳的行為が、上述のような外的制裁によつて、或る程度まで触発されるものである事は論をまたないのであるが、道徳的行為の究極の制裁となるところは、内的制裁である。

道徳的行為の内的制裁とは、複雑な内容を有している主観的情緒であつて、同情、愛、恐怖等の宗教的情緒、小児時代若くは一切の過去の生活の回想、自己反省と自己評価、他人を評価しようとする衝動、自己否定の内的悩み等から生起する諸情緒である。かような主観的情緒として生ずる内的制裁の中、究極にして最高な制裁は、「良心的人類一体の感情」(“The conscientious feeling of mankind”^(註三三))である。そして、この他人と協同調和しようとする「人類一体の感情」は、人間の強い自然的慾求であつて、良心の本質を構成する所のものである。

「人類一体の感情」は、概ね私慾的感情よりは、その強度に於て劣つてゐるものであるけれども、かような「人類一体の感情」を有している人は、私慾的感情に捕われている人より質的に優れているのである。前者の確信に立つてゐる人は、後者を目して善に遠ざかつてゐる人と信ずるのである。此の確信即ち「人類一体の感情」に従い、或は之に背く事より生ずる快不快の感情が、功利主義的道徳の究極の制裁になるのである。

三、正義 (Justice) と 功利 (Utility)^(註三四)

正義の觀念は、功利の觀念から生ずる。正義 (Justice) と 法律 (Jurisprudence) とは、“justum”^(註三五) という同一語源を有していることに依つても明らかであるように、義不義は、法律に従うか否かに依つて生ずるのである。そして、法律は、社会一般の功利を確保する為めに設けられたものであり、従つて法律は、その功利の確保の為に正義を要求するのである。換言すると、法律に従うことが社会の幸福を得る事であり、又それが正義である。反功利主義者であり、動機論者であるカントの「あなたの行為の格率があなたの意志によつて、普遍的自然法とならなければならないように行為せよ」と云う命法も、結局、凡ての理性的存在である人間が、その全体的福利の為に存在し得る規約に依つて、人

間の行為を律しなければならないと云うことを意味している。正義は、道德の本質に於ても、又道德史の上に於ても、諸徳のうち主徳とせられている。その理由は、正義が、社会の幸福を増進する最良の徳であるからである。即ち、正義こそ、自他の權利を擁護し、自他の安全幸福を図るところの徳に外ならないのである。然し、正義を先験的觀念であるかの如く考える人があるが、これは誤りである。ただ正義は、多くの他の道德觀念に比し、非常に大きな力を有するから、非常に神秘的であり、先験的觀念であるかの如くに考えられる。これは、正義が社会一般の幸福を増進する為めの最良の法であり、最も効果ある功利を生ずる徳であるからである。

かように論ずることに依つて、ミルは、功利の觀念が、最高の道德觀念である正義と、その根本に於て一致することを主張することに依つて、功利の觀念が、道德の最高な且つ基本的な觀念であることを立証しようとしたのである。

以上述べたように、ミルの功利主義の思想を通觀すると、ミルは、自己を内省すると同時に、広く社会的存在としての人間を觀察熟視することに依つて、人間の為すべき究極の善行為は、他人の為に奉仕する事に依つて、人間社会全体を幸福に導く事にあることを確信したのである。彼は実に、自己の内部に深く根ざす自己愛、ホッブス以来、英国人の心底に強く根を張る利己主義的思想を克服して、社会全般の幸福の達成を念願することにより、人道主義乃至キリスト教の博愛主義の思想の使徒となつたのである。

註

註一 Autobiography, 1872

註二 ジェームス・ミルは、東印度会社の高級社員であると共に、学者であつたので、印度の研究をして發表したものである。

註三 A System of Logic, 1843

註四 Jeremy Bentham: Introduction to the Principles of Morals and Legislation (道德及び律法の原理序説), 1789

註五 ミルの著書 A System of Logic (論理学体系), 1843

Essays on Some Unsettled Questions of Political Economy (経済学の諸未決定問題論), 1844

Principles of Political Economy (『経済学原理』, 1848

On Liberty (『自由論』, 1859

Dissertations and Discussions (『論文と討論』, 1859, 1867, 1874

Utilitarianism (『功利主義』, 1863

Examinations of Sir Hamilton's Philosophy (『ハミルトン哲学の吟味』, 1865

Auguste Comte and Positivism (『オウギュースト・コントと実証論』, 1865

Autobiography (『自叙伝』, 1872

Three Essays on Religion (『宗教三論』, 1874

註六 James Mill (1773—1836) は、スコットランドのエジンバラ大学で神学を学び、ロンドンに出て雑誌や評論を出版し、一八一八年には、『英領印度史』を出版した。彼は、学者の生活をすると同時に、東印度会社の社員となつて高位を得たのであつた。彼の著書に次のようなものがある。

History of British India, (『英領印度史』, 1818

Elements of Political Economy, (『政治経済学の要素』, 1821

Analysis of the Phenomena of the Human Mind, (『人間精神現象の分析』, 1829

註七、ベンサムは、ミルより五十八才の年長であり、ベンサムが一八三二年に死去した時には、ミルは二十六才になつていた。スコットランドからロンドンに出て来たミル一家、特に父ジェームスはベンサムに知己を得て、学問並に生活の指導と加護を受けた。このような間柄であつたから、ミルは少年時代からベンサムの感化を受けた事は疑をいれない。

註八、John Locke: An Essay Concerning Human Understanding, (『人間悟性論』, 1689

註九、Auguste Comte: Cours de philosophie positive (『実証哲学論』, 1830—42.

註一〇、Karl Marx: Zur Kritik der politischen Ökonomie (『政治経済学批判』, 1859

Das Kapital, 3 Bde. (『資本』三巻), 1867—1894

註一一、Ernst Laas: Idealismus und Positivismus (『観念論と実証論』, 1879—83

註一二、Ernst Mach: Die Mechanik in ihrer Entwicklung (『人間発展の機械論』, 1883

Beiträge zur Analyse der Empfindungen (『経験分析に對する貢獻』, 1886

註一三 Richard Avenarius: Kritik der reinen Erfahrung, 2 Bde. 「純粹経験の批判」(卷) 1888—90

Der Menschliche Weltbegriff 「人間的世界観」, 1891

註一四 「功利主義」(Utilitarianism) の定義について「Utilitarianism, ch. II 参照。

註一五 Utilitarianism, ch II. (New Edition, published by Willard Small, Boston, 1887) p. 15.

註一六 同右 ch. II, 37—38

註一七 同右 ch. II, p. 38

註一八 キレネ説(Cyrenaics) はソクラテスの弟子アリステイッポス(Aristippos, 435—355 B. C. 頃) によつて唱導された快楽説で、快感を覚ゆる各自の運動の感覚を得る事が幸福であることを主張する。

註一九 エピクロス説(Epicureanism) は、エピクロス(Epikouros = Epicurus, 341—270 B. C. 頃) によつて唱えられた快楽説で、「静かな快」(“Ataraxia”) を自己の精神に味うことが最高善である事を主張した。

註二〇 Thomas Hobbes: Elementa philosophiae 「哲学綱要」

1. De corpore 「物体」, 1655

2. De homine 「人間」, 1657

3. De cive 「社会」, 1642, 1647

: Human Nature 「人間性」 1650

: Leviathan 「レヴィアサン」, 1651

ホッブスの倫理学体系は、「レヴィアサン」(巨大な怪獣の意で国家を意味する) に述べられている。

註二一 C. A. Helvétius: De l'esprit 「精神」, 1758

: De l'homme, de ses facultés et de son éducation 「人間—人間の官能とその教育」, 1772

註二二 「論集」第二卷「二合併号」一一頁

註二三 Utilitarianism, ch. II.

註二四 同右 ch. II. p. 35

註二五 註一七参照

註二六 Utilitarianism, ch. II, p. 18

- 註二七・同右 ch. II, p. 21
- 註二八・ミルの幸福説に関する批難をいふは、Utilitarianism, ch. II, p. 27
- 註二九・Utilitarianism, chs. III—IV
- 註三〇・同右 ch. III, p. 62—64
- 註三一・William Paley: Principles of Moral and Political Philosophy (『道德的並に政治的哲学の原理』, 1785)
- 註三二・Utilitarianism, ch. III, p. 64—78
- 註三三・同右 ch. III, p. 66
- 註三四・Utilitarianism ch. II.
- 註三五・同右 ch. III, p. 107
- 註三六・論集第二卷一、二合併号、一一頁参照

Ninomiya, Genpei

Morality of Utilitarianism

Résumé

In this thesis, I will try to explain the meaning of Utilitarianism proposed by Jeremy Bentham and systematized by John Stuart Mill, expatiating on Mill's own words as follows;

"I must again repeat, what the assailants of utilitarianism seldom have the justice to acknowledge, that the happiness which forms the utilitarian standard of what is right in conduct, is not the agent's own happiness, but that of all concerned. As between his own happiness and that of others, utilitarianism requires him to be as strictly impartial as a disinterested and benevolent spectator. In the golden rule of Jesus of Nazareth, we read the complete spirit of the ethics of utility. To do as one would be done by, and to love one's neighbor as one's self, constitute the ideal perfection of utilitarian morality." (J. S. Mill: Utilitarianism, new edition, published by Willard Small, Boston, 1887, ch. II, p. 38).